葎（むぐら）の母

津島佑子

河出書房新社

葎の母

昭和五十年十一月二十五日　初版印刷
昭和五十年十一月二十八日　初版発行

著　者――津島佑子
装　画――吉川　隆
発行者――中島隆之
発行所――株式会社
東京都千代田区神田小川
電話……(〇三)二九二一
振替……東京一〇八〇二

印　刷――暁印刷
製　本――中西製本

定価は、カバー・帯に表示

目次

葎（むぐら）の母――5
天幕――55
廻廊――105
静かな行進――149
人さらい――179
行方不明――195
あとがき――213

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

津島佑子作品集

葎（むぐら）の母

葎（むぐら）の母

内堀の青ずんだ光と砂利の白い照り返しとが、空中の雪夫の体を実際よりも高い位置に見せていた。雪夫は微笑を浮かべ、おとなしく光に抱かれていた。自分の高みにうっとりして、なにかを、例えば足もとにいる私のことを考えているようには見えなかった。

といっても、それはほんの二メートルにも足りぬ高さで、そこから跳び降りようと思えば雪夫はいつでも簡単に跳び降りられるのだった。が、まるでつむじ風にさらわれ、高い木の梢にぽつんと置き去りにされたところが案外気に入ってしまい、自分を泣きながら深し求める親の姿を満足気に見下ろしている子どものように、雪夫はシーソーの取手にしがみつき、両足をぶらつかせ、一方の端に坐っている私の重い体を眩しそうに眼を細めて見つめ続けていた。

私はすでにシーソーの支柱の手前すれすれのところまで体を進めていた。しかし、私の体はわずか一センチでも浮かび上がりそうになかった。私と雪夫との体重の差はシーソーの上では量りきれなくなっていた。それは互いに予想していたことで、楽しみにさえしていたところもあったのだが、現実

に雪夫の体が自分の重みで空中に縛りつけられてしまうと、私は、思いもつかなかったことに出会ったような気がしていた。自分の肉が急に枠を失ってしまった感じだった。

雪夫を仰ぎ見ながら、私は汗ばんだ左手で固く膨れ上がったおなかの表面を撫でさすっていた。固ゆでの卵に似た感触だった。その卵は普通の人より長い雪夫の腕でも抱えきれない大きさに育っていた。更にそれが膨脹し、まず私が呑みこまれ、次いで雪夫のおいしくもなさそうな体が狙われる、こんな考えもよぎった。けれどももちろん、これもぼんやり浮かび上がってはすぐに消え去ってしまう類いの考えのひとつにすぎなかった。あと一ヵ月もすれば、間違いなく卵から赤ん坊が産まれ、私の体はすっかり軽くなるはずなのだった。

その時、私はなにも考えていなかったと言ってよい。二十年以上もの昔に故人になった父と兄のことは当然ながら、生きながらえている母のことも考えていなかった。雪夫の姿を青い映写幕に映しだされた幻像のように眺めていた。短かい前髪が汗で額に貼りつき、鼻の頭が草の汁に染まったように青く光り、雪夫は長ズボンをはいた十歳前後の少年に見えた。気温の一番高い昼どきだったが、内堀から吹き上げてくる柔かな風が心地良かった。

私と雪夫のほかに、その堀端の公園には赤いポロシャツを着た老人が一人いるだけだった。老人はベンチに腰かけて、対岸の森を眺めていた。背後でシーソーに戯れはじめた私たちを一度も振り向こうとしなかった。眼に映る緑に圧倒されて老人は身動きできなくなっているように見えた。森がその溢れる緑を支えきれず、堀に流しこみ、水をも緑色に泡立てているのに比べて、公園に植えられてい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

る苗木の緑は石灰の粉をまぶしたようで緑とも呼べず、むしろ地面に敷きつめてある砂利の上に夏の光が集っていた。公園の横の幅広い舗装道路を流れていく車の屋根のひとつひとつにも同じ光が乗っていた。

あとから思い出すと、随分長い間シーソーの上で雪夫と顔を見合わせていたような気がしてならないのだが、実際にはほんの一、二分の間のことだった。その幻燈の画面を一齣進めるきっかけを作ったのは、私でもなく、雪夫でもなく、九ヵ月目の胎児だった。それが唐突に勢いよく動きはじめたのだ。狭い卵の殻を突き破って、一気に空に飛び立とうとするような動きだった。

それが動きだすようになってから二ヵ月以上も経っているのに、私はまだ慣れることができずにいた。宿主の私になんの合図もなく、しかも少しの遠慮もなくはじまるその動きは、いつも大きな猫の濡れた舌を連想させた。楽しむどころか、我慢のできない動きだった。その時も私は思わず透明な猫を払いのけようと右手を突きだしていた。もちろん、そんなことで動きが止まるはずがない。むしろいつもより激しく動きだしてしまったおなかを私は両手できつく抱えこみ、雪夫を見上げた。

雪夫は相変わらず取手にしがみつき、足をぶらつかせていた。が、その顔は九歳で死んだ私の兄の顔に変わっていた。

それが本当に兄の顔だったのか、今の私には言いきる自信がない。雪夫が顎を引いたり、日光の眩しさに眉をひそめたりしていて、いつもの顔と違って見えただけのことだったのかもしれない。現に、雪夫はどこかに呑みこまれてしまっていたわけではなく、その時の私の様子をちゃんと見届けて

いて、私の表情の変化に乱暴で投げやりなものを感じていた、と後になってから言ってくれたのだ。だが、それは雪夫のこじつけに過ぎない。私はちょうど、客と話している応接間に泥だらけで駆けこんできた子どもを目つきで叱りつける母親のように、兄を、あるいは雪夫を眺めていたはずだった。こんなところに入ってきて、しかも、そんな泥だらけで、お客さまに失礼でしょう。大切なお話をしているところなんですよ。……しかし、九歳の兄は眼を閉じて、薄笑いを浮かべていた。

私はすぐに立ち上がり、シーソーから離れようとした。雪夫を探すにも、兄を叱りつけるにも、とにかく安全なところまで逃れなければ、と考えていた。知らず知らず、自分のおなかをかばっていたのだと思う。立ち上がった私は充分にシーソーから身を退いたつもりだった。ところが、おなかは自分で考えているよりもずっと大きくなっていて、その上、体の動きも鈍くなっていたので、まだ坐っている雪夫の重みで急に跳ね上がったシーソー板の縁を避けきれなかった。もっとも、強く打ったのはおなかよりも頭の方で、これもまた私が咄嗟におなかをかばったためなのだと思うが、私は痛みを感じる暇もなく意識を失ってしまった。それから一時間後に目覚めて、考えを巡らすまでもなくすぐに気がついたことは、九歳で死んだ兄の顔など自分は実際には少しも憶えていないということだった。思い描こうとしても、鼻ひとつ浮かび出てこない。

兄は私が生まれた頃から入院生活を続けていた。表情も言葉も持たない、蒼白い軟体動物のようなものが狭い病室のベッドにうごめいていた様子だけは憶えている。そんなものに顔というものが備わっているとは、私には考えもつかなかった。それを人間のように扱い、話しかけている母が不思議だ

ったが、また、それを邪険に扱う母も想像できなかった。どんなに変な生きものでも、やはりそれは母の息子だった。

兄が遺体で戻ってきた時、その三年前には父が同じように遺体で戻ってきたということだったが、まだ六歳の私にはそれをどう受けとめればよいのか分からず、悲しみようもなく、死んでからはじめて人間らしくなった兄が薄気味悪いだけで、直接そこに眼を向ける代りに母の姿ばかりを眺めていた。私がすり寄ろうと、葬儀屋に邪魔扱いされようと、伯母が泣きながら話しかけてこようと、母は無言で睨み返すだけで、時間を惜しむように兄の顔にすぐさま眼を戻し、その睨みつける眼つきは兄に向かっても少しも変わらなかった。眼を口にして、兄の細い体を食べてしまおうとしているかのようだった。涙で眼をうるませるような真似はしなかった。もういい加減に放っておいてあげればよいのに、と私はぼんやり感じていた。兄の死んだ体が母の視線に比べて、小さすぎ弱すぎるような気がした。その時はじめて、兄が気の毒だという気持を起こしていた、ということになるのかもしれない。

しかし、私には母のように兄の姿をいつでもどこにでも描きだすことはできない。まともにその顔を覗きこんだことが一度もないのだから、当然の話だ。私が見たと思った兄の顔をもし母に見せたら、こんなもの、似ても似つかない、とすぐさま馬鹿にされるかもしれなかった。それでも、私は少しの疑いも持たずに九歳の兄と向かい合っていた。ということは、やはり私にとっては現実の兄が現われたことになり、その背後には父が、更にずっと後には母がいたことになるのだ。

こんなことを考えた私は、同時に雪夫にかつて覚えたことのなかった強い執着を感じだしていた。当たり前のことだが、雪夫が母の息子でも夫でもないことがうれしかった。けれども、それは受胎の時に当然、抱いていなければならない思いだったのだ。雪夫の関心はすでに九ヵ月目の胎児の上にしかなかった。

シーソーで二人の体の重みを量り合うことを思いついたのは、無論、私だった。

その頃私が勤めていた洋書店で新しい写真集をまとめて入荷し、ウィンドウにリボンや造花をあしらって並べたことがあったが、なかにサーカス小屋の写真だけを集めた大判の本があった。いろいろな国のいろいろなサーカスが収録されていた。空中ブランコが最初と最後のページを飾り、アクロバットの大きな写真が真中に見開きで納まっていた。被写体になっているのは、むしろ平凡な人間ピラミッドだった。一人の男の両肩に二人手をつないだ男が乗り、更にその二人の肩に足をかけて、金髪の肉づきのよい女が立っている。そして、女の上には痩せた少年が立っている。床にカメラを据え、しかも粒子をわざと荒くした写真なので、五人の輪郭はぼけ、表情も分からなかった。実際には全く危なげのない塔だったのかもしれないが、私はその写真に危ういバランスだけを見、緊張した。

手をつないで、体を四十五度に傾けている二人の男のどちらが肥っても、どちらが痩せても、全体のバランスが崩れ、頂上の少年は転げ落ちてしまう。少年と女と、そしていちばん下の男がいつも神経質にその二人の男を見張っている。片方が肥れば、急いで片方も肥らせる。片方の背が伸びれば、

片方の体も無理矢理引き伸ばす。そして、こうした二人の微妙な差は塔を組む時にしか明瞭に掴むことができないのだ。私はこんなことを考えていた。

帰宅するまでの時間を待ちきれず、私はすぐに電話でアルバイト先の雪夫と連絡をつけ、夕方、店から歩いて二十分ほどのところにある堀端の公園に、腹がぺこぺこだという雪夫を引き立てて行った。

雪夫は私の目的がシーソーだったと知ってもさほど意外な顔はせず、車道から見ればかなり目立つ場所で、しかもおなかの大きな女とシーソー遊びをはじめることにためらいも見せなかった。一刻も早く夕飯を腹のなかに詰めこみたかったからなのかもしれない。ちょうど小学一年生がはじめて自分の席と定められた場所に坐るように、雪夫は鹿爪らしくシーソーにまたがった。すでに私の体重は小柄な雪夫を少し越えていた。雪夫が後に腰をずり動かすことで、その時はバランスを得た。ついでに五分ほどシーソーで遊び、ブランコにも乗ってから、公園を出た。

〈ただ、ふくらんでいるだけじゃないんだな……〉

と地下街の中華料理店に入ってから、雪夫ははじめて口を開き、横眼で私のおなかを盗み見た。私はわざと六ヵ月のおなかを突き出して答えた。

〈これから時々つきあってよ。結構、面白いでしょ、あなたにだって。本格的に重くなるのはこれからしいわ……〉

けれども、私は注文した料理が運ばれてくるのを待ちながら、六ヵ月も無駄に過ごしていたわけ

だ、としきりにくやんでいた。雪夫とシーソーに乗るのも、本当はこれまでの六ヵ月間に意味があったような気がした。もともとの二人の数キログラムの差が段々に縮まり、ちょうど同じ体重になったのはいつ頃だったのか。ほんの一週間前だったのかもしれない。さして関心を持っていたことではないのに、確実に量ることもできたのだと思うと、急にこだわりだしていた。が、それだけ私はシーソーという遊具を見つけて、心をはずませていたことにもなる。ようやく、これで自分のおなかの膨らむ速度に追いつけたと思った。

事実、急速に変化する体のバランスをたった一人でとりながら歩くのはむずかしいことだった。銭湯に行くたびに体重計に乗ったり、巻き尺で腹囲を測ったり、夜には絡みついてくる雪夫の手をおなかに導いたりもしたが、私には自分の体の変化が摑みきれなかった。明らかにおなかは膨らみ、体重計の目盛りは増しているのだが、それは爪や髪の毛が伸びるのと同じようにしか感じとれず、爪ならばいつか切り捨てておしまいなのだ。でも、おなかの変化はもちろんそれだけの変化であるはずがない。まして、私は四ヵ月後の自分が小さな赤い人間を胸に抱いている図を厭うどころか、期待をこめて想像していたのだ。

体の変化にはじめて気がついた時、私は雪夫に同意を求めるというよりは無理矢理、子どもを産むことを認めさせた。雪夫の子どもでもあるわけだから、雪夫には関わりがないことだ、と言いきるつもりはなかった。が、いったんおなかが膨らんでしまえば、雪夫にはせいぜいはかりの分銅の役目しか果たせない。手離すわけにはいかないがそんな雪夫に相談の真似ごとをわざわざしようとも思いつ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c